

へす。年號ノよみやう訓解を記したる書有之候哉。

本朝年號の事、先年滋野井殿へ窺申處、凡て吳音にて唱る事に候へ共、吳音にて連聲のあしく、聞ニ
うるさき唱は、漢音にも唱る也、文明慶長(カウカウ)と唱べきを、俗にはブンメイ、ケイ長と云ふはあり、乍然難陳の度々音義の悪きは一難を得る事に候へども、先是ジユク、ヒヤウ、ナン等ノ音ノあるハ、
勘例に省く事之由、又大化は大化と濁音ニ可唱事ニ候へ共、往昔より大化トスミ來り候類も在
之候由、此外いろ／＼の口話御座候キ、年號ノ儀ハ別に考運會トカ申書御座候由文章家ノ由文章家ノ由文野井秘

家にも御藏本無之由承申候。

〔秋齋間語〕慶の字年號に用ればケウとよむべき由、されば天慶もてんけうとて、慶長をけうちやうとよむ人あり、榮花物語月宴卷にて、んけい九年と書たり、板本の書たがへるにやと類本をあつめ校合するに皆おなし。

〔松屋筆記六十七〕勘文并年號の訓法及唐音對馬讀。

同條○革曆勘文に略中建仁難□□□諱、年號用對馬音、御諱用唐音、非深難歟、愚按、仁字已同、和漢復言、不兩箇之間、付輕可計用云々、按に、對馬讀は尼法明、百濟より傳來せる訓法にて、吳音也、法明は山階寺維摩會興行の尼也、年號の訓法は、漢吳音付輕可計用よし此文にて知べし。

〔類聚名物考政事九〕年號字訓を用ひし例、年號の字はすべて漢の制に習ひて立られしものなれば、音讀にして訓を用ひず、玄かるに天武天皇の御宇、日本紀に、朱鳥を此云阿訶美苦利と有を始とせり、さて此後は又かゝる例なくして、又音讀にせし事也、然るに中古の比より假名書歌の序などいふものに、又紀號を訓讀にせし事あり、是は天下にわかつてかくとなへよとの仰方有にはあらず、唯その假名書のさまによりて、やわらかに訓讀にせしものなり、さればとて後世にみだりに訓讀にはすまじきもの、されども假名書には、又さ書たりとて僻事ともいふまじきな